

萬葉卷十に菅根乃スガノナ長春日乎ナガホヘルヒ、卷四に菅根之念亂而云云、こは山菅なり、糸の如き根の多く長く這亂る物なればさる語に冠らせたり。

卷十一に菅根惻隱君結爲我紐緒解人不有、卷十二に菅根之惻隱々々照日乾哉吾袖於妹不相爲、こをたゞ根とのみ重ねつとするはことたらす、根も凝コリとこそつゝけたれ、卷十三に菅根之根毛一伏三向凝呂爾、吾念有、卷三に足日木能石根許其思美菅根乎引者難三等標耳曾結焉、などよめるを思へ、さて此菅は山菅なれば、石根などに生るはもとよりにて、大かたも根多く延て、且根に丸き物さへあまた有故に、こりて曳がたきなり。

山菅は和名抄に麥門冬夜麻メイモンドウヤマ須介スジてふにて、集中には右の如く、すげとのみよめるも、多くは山菅なり。

〔枕草子〕草は 山すげ

〔和泉式部集五〕秋花どものさきたるに、やますげのさきたるをみて、おときけば人の物思ひやますげの心みがほにさける花かな。

〔武江產物志藥草〕道灌山ノ產 麥門冬メイモンドウ小葉中葉コモノアリ

〔剪花翁傳三月開花〕能勢蘭メイセイラン 又 熨蘭イラン 花一重色白開花六月末也方半陰地二分濕土壅土肥淡小便、寒中春芽出し前又花前とも兩三度づ、澆ぐべし、大能勢蘭は長二尺許、中能勢蘭は一尺三四寸許、小能勢蘭は四五寸也移春彼岸より三月上旬迄よし。

〔倭名類聚抄二十〕萱草 兼名苑云萱草一名忘憂萱音喧漢語抄云和須禮

〔箋注倭名類聚抄十〕按毛詩焉得諼草傳諼草令人忘憂說文云憲令人忘憂草也引詩曰焉得憲草、又載萱字兼名苑本之、焦循曰以忘憂有諼名因諼而轉爲憲萱也嵇康養生論合歡蠲怒萱草忘憂、時珍曰萱宜下濕地冬月叢生葉如蒲蒜輩而柔弱新舊相代四時青翠五月抽莖開花六出四垂朝